

女性、働く

高槻成紀

たまたまだが、今回は女性が働く姿について感銘を受けた。原稿は別々に書いていたのだが、その点で共通点があるので、並記することにした。

願えば叶えられる：増井光子先生のこと

増井先生が急逝された。8月30日に「感謝の集い」がおこなわれ、ゆかりの人々の話を聞いた。先生は麻布大学を卒業して獣医になり、動物園の獣医としてスタートし、園長を務められた。一時、麻布大学に招かれて動物人間関係学研究室の教授を務められた。これが今の野生動物研究室の前身でもあるので、私たちとのかかわりも深い。昨年度は新しいカリキュラムで「動物園概論」の中心的役割を果たしていただいた。

「感謝の集い」で聞いた話に共通していたのは、増井先生の温厚な人柄、やさしさ、願いを持ち、実現されたことなどであった。確かにいつも微笑んでおられ、やさしいと感じたが、私にはつねに畏怖とってよい感情があった。それはお会いするごとに弱まり、やさしく接していただいたことに甘えて、ご無理をお願いしたりするようになったのだが、しかし最後まで私の中に消え去ることはなかった。

それはある意味で私の「誤解」といえるものだろうが、私は先生の本かれたものやテレビの映像などを通じてその「すごさ」を知っていたから、その「すごさ」がただやさしいばかりで実現されるはずがないと思っていた。動物園だけでなく、野生動物についての書物も書いておられるだけでなく、あ

れは上野動物園の園長をしておられたときではないか、宮城県の島のタヌキの調査をして成果をあげておられた。いったいどうすれば動物園長でありながら野外調査ができたのか。そうした驚くべきことが無数にある。「感謝の集い」で知ったのは、動物園関係だけではなく、乗馬、ねつけ、あるいはマラソンにまで人並み以上のかかわりをもっておられたということだ。

麻布大学を卒業されたのが昭和34年、学生が100人いて、女性がわずか2人であったという。それがいかにきびしい道であったか、今の学生には想像もおよばないことであろう。そして、増井先生のすごいのは、そうした困難を乗り越える苦勞があったに違いないのに、自分が女性でありながら困難を乗り越えたと思われることが嫌いだったということだ。男とか女とかは関係ない、ただ増井の仕事を評価してほしいということだったようだ。

あれだけの偉業をなし、知名度も高いのだから、多少ともそのことを感じさせるのがふつうだと思うのだが、増井先生はそういうことがまったくなかった。講義の前後にふらりと研究室に寄って親しく話をしていただいたこともあるし、私が予約もしないでズーラシアに行ったときは、気さくに時間を割いて話をしてくださったこともある。

そういう天衣無縫さに接するたびに、私の中で「やっぱり気さくでふんわりした人なんだ」という安堵感と、「これだけ気取らないというのは、桁外れの人に違いない」という思いが交錯していた。

「感謝の集い」で話をされた多くの人は増井先生の「願う人」の部分で強調された。動物好きでそのまま獣医になって動物園長になった人をロマンチックな「dreamer」とみるのは自然なことだろう。しかし一人だけ「リアリストであった増井園長」と言った人がいた。私には「証拠がつかめ」なかったものの、そうであったらと思う。動物好きであることを本当に実現するには獣医になることであると見定め、決意したら徹底して努力する。コウノトリの復帰という大課題を実現するためには、県知事を説得しなければならないとみれば、その実現のためになすべ

きことをする。そうしたクールな計算がなければ、情熱だけでことが実現するわけではない。増井先生は私のような凡人には「すごさを感じさせないほどすごい」人だったのだと思う。

ひるがえって麻布大学に入学する多くの「動物好き」の学生はどうだろう。動物は好きだが、勉強は嫌いだと平気で言うし、就職がなさそうだと知ると進路をやすやすと変更する。増井先生がよく言われた「願えば叶えられる」ということばの背後に、その願いというものがいかに不退転のもので、その実現のためにいかに努力されたかを想像することをすべきであろう。叶わなければ願ったとはいえないのである。

好きな乗馬をして亡くなられたことを悲しむよりは、その強い意志の大切さを心に刻むことこそが、先生のご遺志に応えることなのだと思う。

* * * * *

役割分担？

9月中旬にモンゴルで野生動物に関する国際会議があった。その内容そのものではなく、ジェンダーの問題で思うところがあったので記しておきたい。

国際会議といっても、実質的にはモンゴルとアメリカが主体でそれにロシア、ドイツ、日本などから少人数が加わっているというのが実態に近い。さすがにアメリカ・チームはすごかった。野生動物研究については資金的にも人材的にも世界をリーダーしているのは知っているが、モンゴルで感じたのはその組織力である。多くの助成金を得

て、モンゴルの研究者や組織に組織的に働きかけて成果をあげている。たまたま持参していた司馬遼太郎のエッセーに、日露戦争開戦前のことがあった。ロシア大使が国交は誠意だと真正直にふるまっていたのに、日本の暗号がつつぬけで、開戦そのものも、日程もすべて知られており、しかもロシアの大使はそれを知った上で平然と会話をしていたのを知って、日本の大使が腰を抜かしたという内容だった。それを読んでいたので、なんだか同じことを研究レベルで繰り返しているようで情け

ないような気持ちになった。

もっともここでいいなのはそのことではない。そのアメリカの発表者に2人の若い女性がいた。その自信にあふれた発表は水際立っていた。アメリカでは小学生の頃からプレゼンテーションの訓練をするから、鍛えられているということはあるが、それにしてもすばらしいと思った。そのうちの一人はグループディスカッションをしたときのとりまとめ役も務め、これがまたすばらしかった。こまごまとした質問に大しても相手の眼を見つめてよく聞き、誠実な印象を与えた。発言の公平性、内容のバランスのとりかた、流れの形成なども巧みで、終わったらすばらしい内容のまとめができていて全体会議でも立派な報告をしてくれた。言葉のハンディがないから司会がしやすいということもあるが、この人のすばらしさがそういうレベルではまったくなく、まちがいなく聡明で誠実であることが誰の胸にも納得された。こうしたことにもアメリカの教育のよさが現れていると感じた。

ただ、堂々とした態度に限っていれば、モンゴル人も同様であった。女性の研究者が多いし、発表のときにあるアガるといことが感じられなかった。どうも人前で緊張するのは中国、朝鮮、日本の極東組で、モンゴルはそうではないようだ。モンゴル人は何事にも大雑把だから、いいかげんといえがいいかげんだが、人が萎縮したところがない。

ところで、モンゴルでは日本のNHKのテレビが見られるので、ホテルでニュースを見た。会議でのアメリカとモンゴルの女性たちの立派な態度に印象

づけられていたせいか、日本のニュースの形が気になった。思えば日本でのニュースのありかたは男女のキャスターがいるものの、男性がアンカーで、女性は「副」という役割である。あいづちを打つか、きびしくいうと添え物のようである。昔は男一人だったところに女性を登場させたのだから改善されたという意見はあるだろう。だが、それ自体が問題ではないか。

どうだろうか。私たちに政治問題は男性が、女性は子供のこと、天気などを報道するという役割分担を当然とするような意識がないといえるだろうか。それは間違いなく差別である。差別をしながら、意識していないにかかわらず、差別していないふりをする、あるいは差別していない気であるというのはよくない。

もっともこれはかなりデリケートな問題で、世界には露骨に性差別する国もたくさんある。そうした国と比較すれば日本ははるかによいと思う。ただ、そうした男女の役割分担のようなことを子供の頃から毎日見せられていると、男性に「女性はそれで十分だ」という気持ちが生まれたり、女性自身に「私たちはそのくらいでいい」という感覚が形成されたりするのは、とてもよくないことだと思う。

蛇足で付け加えれば、モンゴルの国際会議で堂々と発言していた女性たちはいわゆる男勝りではなく、とてもエレガントでもあった。

